

# 名馬でたどる 千代田牧場

by 有吉正徳

No. 1

千代田牧場で生まれたウシュバテソーロ（牡6歳、美浦・高木登厩舎）が競馬史に残る快挙を達成した。ドバイワールドカップ制覇だ。偉業が達成された時、何が起きていたのか。

◇

2023年のドバイワールドカップは3月25日、アラブ首長国連邦（UAE）ドバイのメイダン競馬場で行われた。1996年に創設された同レースは今年27回目を迎えた。

日本馬によるドバイワールドカップ制覇は2011年のヴィクトワールピサを最後に途絶えていた。この時はオールウェザー（全天候型）コースで行われていた。ダートコースを舞台にしたドバイワールドカップでは2002年のトゥザヴィクトリーと2021年のチュウワウイザードが2着になったのが最高で、日本馬はいまだ頂点に立ったことはなかった。

賞金総額1200万ドル（約16億円）、1着賞金696万ドル（約9億2千万円）をかけて争われたレースには、15頭の出走馬が集まった。地元UAEと米国から各2頭、英国、バーレーン、サウジアラビアからの参戦がそれぞれ1頭ずつ。残る8頭を日本馬が占めるといふ陣容だった。

追い切りで初めてウシュバテソーロとコンタクトを取った川田将雅騎手は確かな手ごたえをつかんでいたようだ。現地を訪れていた千代田牧場専務の飯田貴大らに体調の良さを伝え、レースでの戦略も披露した。その夜に行われた枠順抽選会。川田騎手は1頭1頭の枠順を真剣な面持ちで確かめていたという。

川田騎手は枠順抽選会の後、レースでの課題も口にした。ウシュバテソーロにとって初めてのナイター競馬であること。そしてメイダン競馬場の硬いダートだ。散水を繰り返し、ローラーで踏み固めるため、先行馬が蹴り上げるキックバックは追い込み馬にとっては大敵だ。二つの課題をどう乗り越えるか。それはウシュバテソーロの気持ちの強さにかかっていた。

日本中央競馬会（JRA）が発売した海外馬券でオッズ2.1倍の単勝1番人気になったのは米国のカントリーグラマー（牡6歳）だった。前年の覇者は昨年

記者としてウン十年、千代田牧場とのおつきあいも長い有吉正徳氏による牧場コラムを不定期連載にてお届けします。トレンドハンターのフラワーカップの表彰式で馬主と二役の生産者に代わり、台に乗っていたのは有吉氏でした。第1回はウシュバテソーロの話題から。

と同じように年明け初戦のサウジカップで2着となり、このレースに臨んでいた。手綱を取るのは名手L・デットーリ騎手。

そのサウジカップでカントリーグラマーを下して優勝したのは日本のパンサラッサ（牡6歳、栗東・矢作芳人厩舎）だった。パンサラッサもサウジアラビアから転戦し、ドバイワールドカップに駒を進めていた。サウジカップは生涯で2度目のダート戦だったが、持ち前のスピードを生かし、見事な逃げ切り勝ち。世界最高の1着賞金1000万ドル（約13億円）を獲得した。

サウジカップでは最内の1番枠から逃げ切ったパンサラッサが、ドバイワールドカップでは大外の15番になった。先手を奪うまでにエネルギーを消耗した上、ライバルたちもサウジカップの轍を踏まないよう早めに追走した。レースはスタート直後から緩みのないペースになった。

ウシュバテソーロはオッズ9.6倍の4番人気に支持されていた。昨年10月のブラジルカップ（東京・L）からの連勝はカノープスS（阪神）、東京大賞典（大井・GI）、川崎記念（川崎・JpnI）と「4」にまで伸びていた。ダートに転じてからの成績は6戦5勝、3着1回。すべて違う競馬場で4連勝したように、どこへ行っても変わりなく実力を発揮することのできるタイプは、初めての海外遠征でも期待された。

それまでの3戦でパートナーを務めていた横山和生騎手は同じ日に国内で行われる日経賞でタイトルホルダーに騎乗することなどの理由からドバイ遠征が難しく、川田騎手に手綱を託した。

スタートして最後方のポジションになっても川田騎手は慌てず騒がず、じっくりとウシュバテソーロのリズムを守った。前年のチュウワウイザードでも後方から追い込み、3着に導いたのが川田騎手だった。「海外に行っても相手に合わせるのではなく、自分の競馬に徹すること。それが勝利へのカギ」と言っていた通りの戦法だ。

最後の直線、英国のアルジールス（セン6歳）が先頭に躍り出て粘り込みを図る。そこへ豪快に追い

込んできたのがウシュバテソーロだった。心配されたキックバックにも決してひるまず、1完歩ごとに差を詰め、ゴールではアルジールスに2馬身4分の3差をつけていた。勝ち時計は2分3秒25。レース直後の馬上インタビューで、いつも冷静な川田騎手が「日本のみなさん、ありがとうございました」と興奮気味に話した。川田騎手の右肩にはキックバックを受けてきたあざが残ったという。表彰式ではウシュバテソーロと川田騎手を称える日本の国歌が場内に流れた。

川田騎手は2021年に米ブリーダーズカップフィリー&メアターフでラヴズオンリーユーに騎乗し、日本人騎手として史上初のブリーダーズカップシリーズ優勝を果たしている。ドバイワールドカップでも日本人騎手初の優勝を達成。ブリーダーズカップ優勝とのダブルタイトルに輝いた。

2017年3月4日、ウシュバテソーロは千代田牧場で生まれた。父オルフェーヴル、母ミルフィアタッチ、母の父キングカメハメハという血統だ。7月のセレクトセール当歳に上場。了徳寺健二ホールディングスに2500万円（税抜）で落札された。

美浦の高木登調教師に育てられ、2019年8月に新潟でデビューする。翌年4月、デビュー7戦目の東京で初勝利を飾った。2勝目は2021年5月、新潟だった。3走後の福島で3勝目を挙げた。芝の長距離戦で実績を残してきたが、高木調教師はその走り方などからダート適性に期待し、オーナーにダート転向を進言した。

デビュー23戦目の横浜Sは、ウシュバテソーロの運命を分けるレースになった。東京競馬場のダート2100m戦。4コーナーを14頭立ての13番手で回ったウシュバテソーロは、直線だけで前の12頭をかわしたばかりでなく、2着に4馬身もの差をつけて快勝した。ダート適性を結果で示したのだ。その後はドバイワールドカップまでダート界の階段を一気に上り詰め、世界ナンバーワンの座についた。

ウシュバテソーロの父はオルフェーヴル。2021年に米ブリーダーズカップディスタフを制したマルシロレーヌもオルフェーヴル産駒だ。ドバイワールドカップとブリーダーズカップという二つの世界的な

ダート戦で優勝する産駒を送り出した。

ウシュバテソーロの母ミルフィアタッチは2006年生まれ。飯田正剛の服色で2歳から4歳まで走り、25戦3勝の成績を残した。ウシュバテソーロはその6番目の子にあたる。

飯田がウシュバテソーロの祖母シジュームサン（米国産）を米キーンランドセールで購入したことが、ウシュバテソーロの出現につながった。フランス語で「第六感」を意味するシジュームサンは1992年生まれ。現役時代は米国とフランスで走り、22戦7勝を挙げた。米国では芝のGⅡを2勝、同じく芝のGⅢを勝っている。

日本に輸入された後、ブライアンズタイムと交配されて1999年に生まれたのがボールドブライアンである。ボールドブライアンは東京新聞杯で優勝するなど5勝する活躍を見せた。ボールドブライアンの7年後に生まれた半妹がミルフィアタッチである。

千代田牧場には牝系を大事にする伝統がある。古くから日本にある牝系を守り育てていくことと、輸入牝馬を生かしていくことがバランス良く続けられている。明治時代に輸入されたビューチフルドリーマーからニッポータイオー（天皇賞・秋などGI3勝）やビクトリアクラウン（エリザベス女王杯）を生み出す一方で、輸入牝馬を源にして送り出した生産馬にはサークルオブライフ（阪神ジュベナイルフィリーズ）やダノンプラチナ（朝日杯フューチュリティS）がいる。ウシュバテソーロは後者に属するパターンだ。

千代田牧場に流れる伝統。古いものと新しいものとともに生かす絶妙なバランス感覚がウシュバテソーロを生んだ背景にある。

◇

次回からは千代田牧場の歴史をたどっていく予定です。今後もお愛読をお願いします。

有吉正徳（ありよし・まさのり）1957年1月、福岡県出身。1982年、東京中日スポーツで競馬記者デビュー。1992年に朝日新聞に移る。ミスターシービー以降、コントレイルまで6頭の三冠馬を取材。2022年に定年退職し、フリーの競馬ライターに。著書に「2133日間のオグリキャップ」「第5コーナー〜競馬トリビア集」。朝日新聞金曜夕刊スポーツ面の「有吉正徳の競馬ウィークリー」は連載開始から20年たった。週刊競馬ブックで「一筆啓上」、JBBAニュースで「第5コーナー」を執筆。